

経法学部 前期日程

令和七年度入学試験問題

国語

注意事項

- 一 この問題冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはいけません。
- 二 解答は、別に配布してある解答用紙の該当欄に記入してください。
- 三 受験番号は、解答用紙の指定された箇所に入力してください。決して氏名を書いてはいけません。
- 四 この問題冊子は、試験終了後に持ち帰ってください。

1

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(配点六〇点)

私たちは特に教育を受けなくても、教えられなくても多くのことを知っている。手に持っている物体を空中で離せば、それは落下する、力を加えれば物体は動く、重いものは動かしにくいなどは、中学で物理を学ぶまでは知らない、というわけではない。生き物は成長する、餌を与えなければ動物は死ぬ、病気はうつることがある、等々もそうだ。学校で理科を学ぶずっと前からそんなことはみんなよく知っている。

つまり私たちは自分の経験、他者の経験の観察から、教わることなしに知識を獲得している。そうした知識はバラバラに存在しているわけではなく、相互に繋が^{つな}がりあって、ゆるい体系のようなものを作り出している。これらは科学的な知見が体系化されて理論を作り出すことに似ている。そうした意味で、「素朴^ア」という修飾語をつけて、素朴理論と呼ばれている。生物、物理、心理などが代表的なものとなっている。(中略)

教育、学習というと、多くの人の頭の中には連想的に学校でのそれが思い浮かぶ。ここにはとてもたくさんの構成要素からなる素朴理論があるように思う。その中で「問題と正解」について考えてみたい。多くの人は、

- ・ 問題は出される(既にある)
- ・ 正解がある
- ・ 正解を知っている人がいる(先生)

というようなものを典型的な教育・学習場面だと考えるのではないだろうか。確かにそれらは学校では半ば当たり前のこと

になっている。先生が正解を知っている問題を出して生徒に問う、そこでの反応を見て生徒を評価するというのは学校の日常的な光景である。

ここで認知科学的に問題というものを考えてみる。問題というのは、望ましい状態と現状が一致していないことを指す。そして問題を解決するというのは、望ましい状態と現状が一致した状態のことを指す。どうやって一致させるかというと、現状に何らかの操作を加えることでそれを行う。問題は単一の操作で解決できることは稀^{まれ}なので、複数の操作をうまく順序立てて行わなければならない。つまり解決過程の各時点で、いろいろな操作の中から適切なものを選び出さなければならない。これをうまくやれば解決である。

学校で出される問題のほとんどは、望ましい状態は「……を求めよ」のような形で明確に示される。また現状は問題文の中に記述してある。そして問題解決のために使う操作は、先生が授業の中で事前に教えている。数学などはこれにピッタリと合致する。

学校ではそれでいいのだが、現実はどうなのだろうか。こういう話を講義するときにも話すエピソードがある。それはロッテの「クーリッシュ」という氷菓の開発のことだ。少し古いのだがお付き合いいただきたい。アイスクリームの市場は94年をピークに毎年落ち込んで来ていたという。そこでロッテの商品開発部の担当者は、若者数百名にインタビューをした。すると若者たちはアイスではなく、ペットボトル飲料によって夏の暑さや渴きを癒しているということが明らかになった。そこでこの担当者は、「アイスも持ち運びやすく、飲めるようにすれば良い」と考え、パウチ容器にシエク状のアイスを入れようと考えたそう^だ。ただそこから、コストの問題、アイスの温度の問題などが出てきた。これらの問題をクリアして発売に至ったのだが、初年度の売り上げは予想以上であり、当初の目標の2倍以上に引き上げられたという(この部分は2003年11月29日の朝日新聞の記事に基づいている)。

さてここでの問題とは何だろうか。よくいるのだが、アイスの売り上げが減少していることと答えた人は間違っている。ある困った事態が発生したときに、それを問題と考える人がいるが、それは違う。それは現状である。望ましい状態は売り上げを増やすこと(減らさないこと)である。ただ、売り上げを上げたいと念じていても売り上げは上がらない。だからこのレベルで問題を捉えても解決はできない。そこで問題をより具体的で、操作が可能な問題の形に変形しなければならない。そこでこの開発者はインタビュを通して、「持ち運びやすく、飲める」アイスを開発するというゴールを作り出す。これによつて問題自体を創発させているのだ。この問題の解決のためのオペレータは、パウチ容器を用いるとか、シエーク状にするなどである。もちろんそこからさらにいくつもの問題が出てくるのだが、この開発者の素晴らしいところは、問題を作り出している。創発させているという点にある。問題は初めは存在していないのだ。単に困ったなあというのは問題ではない。自分が用いることのできる操作がうまく適用できるように、自分で作り出さなければならないのだ。また言うまでもないことだが、彼が問題を解決しようとした時には、正解を知っている教師はいない。そもそも正解なんか、誰一人わからないことが多いのだ。

(中略)

大学では教養課程(最近はそのような言葉を使わないが)で、3、4年でやることの基礎になることを教えるという建前になっている。しかし当然だが教養で学んだことだけでやれることなどほとんどない。そうした場合、何を学べば問題を解くのに有効か、どんな書籍や論文にあたれば有効かを自分でその場で考えなければならない。これは大学で研究をしているような私たち教員にも当てはまる。これまで学んだことですぐにわかってしまうような問題はそもそもつまらない問題が多い。だから、未知の領域にチャレンジし続けなくてはならないのだが、未知の問題なのでその基礎というのを事前に知ることはできない。

学校で通用する「基礎から応用」という前提は成り立たない場面があるのだ。自分で創発させた問題の解決を目指し、自分の

認知的リソース、環境のリソースを揺らぎながら探索していくしかない。

学校のテストというのは全員が沈黙の中で一人で問題を読み、一人で答える。相談したり、参考書を開いたりすることは許されない。そうした状況で良い成績を取る人が頭のいい人とされる。頭の中に蓄積したこと（認知的リソース）だけを元にして評価が行われる。これに違反するとカンニングと呼ばれ、処罰の対象となる。

しかし、人の知性は環境を前提として組み立てられている。環境に働きかけ、そこから情報を得て、そこからまた考えて再度環境に働きかけるといふサイクルの中で知性は発現するのだ。ここでの環境はいわゆる物理的な環境だけでなく、周りの人々も含んだものである。必要な資料を検索する、同僚、先輩に意見を求める、そうした中で私たちは認知を営んでいるのだ。

だから情報をうまく引き出す方法を知っていることは、頭の中にある認知的リソースを適切に働かせることにつながる。関連する書籍を見つけ出す、その目次を利用する、索引から調べる、検索ソフトの使い方を知っている、そこでの絞り込み方を身につけている、そうしたことは頭がうまく働くためには必須だ。また自分の置かれた状況をわかりやすく相手に伝える、うまくアドバイスを得るための質問ができる、こうしたことも社会の中で知的に行動するためには必須のことだ。さらに言えば、うまく知性を働かせる環境を用意する、いい仲間づくりをすることもとてもだいじなのだ。

（出典：鈴木宏昭『私たちはどう学んでいるのか』、筑摩書房、二〇二二年、一七二頁～一八二頁）

*なお、出題の都合上、小見出し及び文章の一部と傍点を割愛している。

問一 傍線部アの「素朴理論」とは、どのような認識の体系のことか。四〇字以内(句読点を含む)で説明しなさい。

問二 傍線部イの「この開発者の素晴らしいところは、問題を作り出している＝創発させているという点にある」という記述について、この開発担当者ほどのような問題を創発したのか。二五字以内(句読点を含む)で説明しなさい。

問三 傍線部ウの「自分で創発させた問題の解決を目指し、自分の認知的リソース、環境のリソースを揺らぎながら探索していくしかない」とは、どのような問題解決の過程を意味しているのか。九〇字以内(句読点を含む)で説明しなさい。

問四 本文全体の内容を表すのに最も適切な語句を次の五つの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 論理性 イ 想像性 ウ 共感性 エ 創造性 オ 感受性

2

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(配点七〇点)

マッチングアプリを安易に否定する傾向には注意が必要ですが、それが及ぼしうる社会的影響についても考えてみましょう。

第一に、人々の持つている既存の価値観を補強するという側面があるように思います。

マッチングアプリのような新しい手段が登場すると、世間ではそれが社会をどう変えるかに関心が集まります。

しかし、新しく登場した手段が必ずしも新しい価値観を生むわけではないという視点も大事です。むしろ、新しい手段が古い価値観を補強することもあります。「出会いの手段」が多様化しても「出会いの目的」が画一化する可能性があるのです。

AIによるアルゴリズムは各個人の初期傾向に沿って生成されるため、すでに存在する価値観をより強化する傾向を持っています。マッチングアプリもまた、社会通念に沿って、それを後押しするかたちで、既存のジェンダー規範や結婚をめぐる価値観を補強していく可能性があります。これが異質な他者への理解を妨げることも考えられます。

以前、ある結婚相談所で取材を行った際に、最近では「結婚相手が見つからない」という理由ではなく、「より良い結婚をするために」20代前半から利用する女性も増えているという話を聞きました。結婚相手との出会いを偶然に任せていては非効率だし、リスクが高いということです。

結婚相談所では最初から学歴や年収、趣味、家族構成などの詳細な情報を得られます。自分の理想に合ったパートナーとわざわざ効率的に出会うことができるというわけです。

社会学者エヴァ・イルズは、親密な関係性が経済モデルに浸食される傾向に警鐘を鳴らします。今日では、パートナー選択がますます合理化モデルに依拠するようになり、ウェブ恋愛はその「道具化」を加速化させていると指摘するのです(田中)

Illouz, *Cold Intimacy*).

マッチングアプリはあらかじめ「条件の合わない人」を排除できるため、リスクが少なく合理的な手段だと認識されるでしょう。しかし、効率性を求め自分の利益を最大化しようという行為が(①)になれば、人はあらかじめ自分自身にとって「価値がある」と考えた人とだけ交流することになりかねません。

「コスパ」や「タイパ」を重視し、学歴や年収、外見などの条件で相手を絞り込むことが、既存の価値観をかえって強化していないかという懸念です。すでに存在する「スペックの社会的序列」がいつそう固定化される可能性があるように思います。

アプリは人々を「最適解」へと導いてくれます。しかし、そこで失われるのは偶然性です。

人は他者との偶然の出会いや関わりのなかで、絶えず価値観の修正や刷新をおこなうものです。しかし、固定化された最適解に従うことで、自分に合わない(と思ひ込んだ)他者への理解や自分自身が変わる可能性が阻害されてしまいます。

そもそも最適解とはあくまでその時点における個人から導き出されたものにすぎません。それが長い目で見て本当に最適解であるという保証はないのですが、このことが省みられる機会が奪われ、自由を奪われることがあるように思います。

さらに指摘しておきたいのは、個々人の合理的行為が社会全体に(②)に働くとは限らないということです。

実際、マッチングアプリの普及はそれほど成婚率に寄与していないという調査結果もあります。婚姻件数全体に占める「アプリでの出会い」の割合は増えていても、婚姻数の増加にはあまり貢献していない可能性も指摘されます。

個々の単位で見たとときには合理的な行動であっても、皆が同じような行動をとってしまうと、全体としては悪い状況がもたらされてしまうことを「合成の誤謬」といいます。

各人が(③)にパートナー選択をおこなっていると考えていても、それが社会全体のマッチングを効率化するとは限らないのです。

各人が持っている初期傾向がより固定化される結果、全体においてマッチングの「非効率」が生じるわけです。もうひとつ、「コミットメント・フォビア」について述べておきます。

オンライン上のマッチングは、パートナー選択の範囲を大幅に拡大しました。一人当たりのパートナー候補の人数は、リアルな出会いとは比較になりません。しかし、こうした状況が(④)に「決定」や「持続的関係」を困難にする可能性があります。

選択の範囲が広がったことで、個人が「もしかしたらもっと良い人がいるかもしれない」と理想のパートナーを探し続けてしまうような状況に陥りうることは、以前から指摘されてきました。

社会学者アンソニー・ギデンズは、著書『親密性の変容』(原著1992)で、現代の関係性は、外部の規制や伝統的拘束から自由であるがゆえ、明確な「ゴール」が定まらず「もしかしたらもっと良い人がいるかもしれない」と永遠に理想のパートナーを探し続けてしまうようなアディクション状況に陥りうると指摘しています。

マッチングアプリはこうした傾向をより推し進める可能性があります。

近年、注目されるコミットメント・フォビアとは、端的に言えば、特定の誰かと深い関係になることを忌避(嫌悪)する症状^dを意味します。

パートナー選択の可能性が無限に拡大することで、ある特定の関係に深くコミットしてしまうことへのためらいが生じたり、あるいは、いったん交際を始めても「もっと良いかもしれない」という可能性が持続的な関係を脅かしてしまう。特定の相手にこだわるインセンティブが低減してしまうことで、個々人の不安定性が増大するということです。

エヴァ・イルズは、特に男性にコミットメント・フォビア傾向が強まっていると指摘します(Eva Illouz, *Why Love Hurts*)。恋愛市場で男性に重視される経済的資源は加齢により高まる傾向があり、「性的魅力」も女性より男性のほうが持続

期間が長いと思ひ込まれているということです。

一方、女性はパートナー選択において出産などの身体的リミットを考慮する傾向が強く、選択肢が広がる状況では、子どもや献身的な関係を求める傾向の強い女性たちが不利な状況に置かれやすいということです。

いつまでも幻想にとらわれ続けコミットメントを忌避する男性と、早期に安定的な関係を望む女性との間でミスマッチが生じるという指摘です。議論の余地はありますが、マッチングアプリが及ぼしうる(5)影響のひとつとして紹介しておきます。

(出典：阪井裕一郎『結婚の社会学』、筑摩書房、二〇二四年、一〇七頁～一二三頁)

*なお、出題の都合上、小見出しなどを割愛し、ふりがなをあらためている。

問一 本文中のa～eの漢字の読みをひらがなで記入しなさい。

問二 本文中の(1)～(5)に最もよくあてはまる言葉を次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。ただし、ア～

オを用いることができるのはそれぞれ一度だけである。

- ア 社会的 イ 合理的 ウ 結果的 エ 支配的 オ 効率的

問三 傍線部アの「人々の持っている既存の価値観を補強するという側面」とは、具体的にはどのような手段がどのような価値観をどのようなかたちで補強するという側面のことか。文中の言葉を使って、「という側面」という言葉につながるように、七〇字以内(句読点を含む)で説明しなさい。

問四 傍線部イでは「自由を奪われる」と述べられているが、ここではどのような状態を「自由」と呼んでいるのか。文中の言葉を使って、「という状態」という言葉につながるように、七〇字以内（句読点を含む）で説明しなさい。

3

(※注1) (※注2)

リバタリアンとパターナリズムという二つの考え方があることを前提としつつ、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(配点七〇点)

リバタリアン・パターナリズムという言葉が最初に人びと^aのジモクを集めたのは、いうまでもなくキャス・サンスティーンとリチャード・セイラーの共著論文「リバタリアン・パターナリズムは撞着語^{どうちやくご}ではない Libertarian Paternalism Is Not an Oxymoron」……と、共著書『ナッジ Nudge』(邦訳題『実践行動経済学』)の公刊だった。この二編によって、サンスティーンとセイラーは、一躍この斬新な社会規律手法の主唱者として認められるようになったのである。

おそらくリバタリアン・パターナリズムという命名自体が、彼らの野心を最も直截^{ちよくせつ}に表している。彼らの主張はまさに、権力的強制に頼ることなく、すなわち、行為者の選択の自由を狭めることなく(リバタリアン)、一定の有益な行動を促し、あるいは有害な行動を控えさせることで行為選択者当人の状況を改善させるべく働きかける(パターナリズム)手法が存在する、というものだった。つまりこの命名自体が、通常水と油とみなされてきた二つの立場を矛盾なく統合する可能性の発見を宣言するものだったのである。

このような芸当を可能にするために活用されたのが、九十年代に主流派経済学の主要前提への攻撃で注目を集めた行動経済学 behavioral economics の成果だった。それが数々の実験心理学的な観察を通じて明らかにしたところによると、人の日常の行動選択は、しばしば経済人仮説の想定するような合理性を示さず、むしろその基準に照らせば過誤・過失というほかない非合理性を示す。しかしそうした過誤・過失はまったくでたらめに生じているのではない。行動経済学の新味は、そこに一定の統計的な法則性を認めたところにあった。人びとは、つねにいくつかのパタンに沿って同じような過誤・過失を繰り返している。人は単に自己利益の最大化に失敗する非合理的な存在であるだけではない。同じ過ちを避けがたく体系的に反復する存

在でもあるとされたのである。

リバタリアン・パターナリズムは、この発見を二重に活用した。第一にそれは、パターナリスティックな公共政策の正当化根拠を提供する。人が一様に可謬^{かひゅう}的な（同じパターンで自身の状態を自ら悪化させる）存在であるならば、不特定多数の人びとに包括的に働きかけるパターナリスティックな政策は、その限りで必要かつ有効だろう。犯されやすい過誤を正して当人にとって最善の選択をなすよう促すことは、政府が担うべき必要かつ望ましい……干渉とみなされるのである。しかしこれだけなら決して目新しい主張とはいえない。サンスティーンとセイラーの独創は、人びとの体系的可謬^{かひゅう}性を一種の能力ないし政策資源とみなしたところにあつた。人を煩^{わづ}雑かつ反復的に誤らせる心理的機制（錯覚、バイアス……）は、人の行動を強制なしに誘導するための梃子^{てこ}の役割をも担いうる。すなわち、パターナリスティックな干渉者は、権力的強制を通じて行為者の行動を制御するだけでなく、その行為環境（選択アーキテクチャ choice architecture）と呼ばれる）の設計・操作を通じて、行為者が自発的により望ましい選択肢を選びとるよう、間接的に促すこともできる。人びとの無個性的な愚かさは、パターナリスティックな干渉の必要性を基礎づけるだけでなく、より賢明な干渉手法を構成する中核的な要素にもなりうるとされたのである。

こうしてサンスティーンとセイラーは、リバタリアン・パターナリズムを社会の運営に携わる者がつねにその道具箱に加えておくべき重宝な手法の一つとして提唱する。とはいえ、それはあらゆる場面でのべつまくなしに乱用されるべきものではない。それは、人が賢明とはいえない判断にとられ、あるいは合理性を欠いた選択に陥る場面において、そうした誤りを防ぎ、正すための手段として選びとられるべきものである。

サンスティーンとセイラーは、主に行動経済学の成果に拠りながら、いわゆる経済人仮説がさまざまな局面で人の判断と行動の説明に失敗していることを指摘する。人は、しばしば自分の利益に反する判断を下し、その厚生を損なう選択を行つてい

る。その意味で、人は決して自己の厚生についての最善の判定者などではない。そもそも実際に、教科書経済学が想定するほど明確で安定した「選好」をもつ人はいないだろう。むしろ人の選好は、つねにあやふやで、流動的・可塑的な代物であり、当人の幸福追求の指針にはなりえないというのである。

もちろん、個々人の選択の自由を最大限に保障しさえすれば（外からの干渉を控えれば）おのずと人は自身を最善の状態へと導くはずだという想定を非現実的だとする見解は、リバタリアン・パターナリスト独自のものというより、あらゆるパターナリストに共通の見方だろう。行動経済学は、人の非合理的なふるまいがまればないことを指摘するだけでなく、それが一定の法則性をもってほとんどすべての人に生じることを指摘し、その背後にある多様な機制を解き明かすことに力を注いできたのである。

いまその説明の詳細に立ち入る余裕はないが、その基本的なコウズ^ウは、単純ながら誰にも思い当たる節のある二元論的図式に拠っている。それによると、人は通常二通りの判断系をそなえており、どちらが作動するかによって実際の判断と行動は大きく異なったものになるという。一方は一般に「システム1」と呼ばれる反射的・無意識的・習慣的なふるまいを導く自動システムであり、他方は「システム2」と呼ばれる反省的で自覚的、計画的な熟慮システムである。システム2に従う限り、人はかなりの程度合理的にふるまうことができる——自分の「選好」を充足し、自己の厚生を最大化できる——はずだが、実際にこの判断系が作動することはまれであり、むしろ人びとの日常の選択を支配するのはシステム1である。そしてシステム1はつねに多種多様な認知バイアス（……楽観性・自信過剰、現状維持……）の影響下にあつてこれらを相対化できないために、人は深く考えもせずに安直な誤りに陥り、よく考えれば選ぶはずのない選択肢に固執してしまう。どんな人もつねに通常は意識することのないさまざまな環境の影響下で判断し、行動せざるをえないために、そうした認知バイアスからの影響を免れられないのである。

わかつていてもやめられないこの種の判断と選択の誤りは、現実には大小さまざまな損害をもたらしている。それは反射・悪習・悪癖・偏見・不決断・惰性・自棄等々の形をとって行為者本人の中・長期的利益——その健康や所得・資産、幸福の保持や増進——に対し、ときに見過ごしがたい打撃を与えるだろう。また一つひとつの過誤は些細なものであっても、多数の人びとが長期にわたってそれを反復するならば、やはりその被害は深甚なものになりかねない。それらはいずれも、個別には直接誰かの利益や権利を侵すものではないため、従来、政府による強制的な規律の対象とはみなされてこなかったものの、自己責任に委ねられるかぎりは克服できず、センザイテキには社会問題として公共化されうる（されるべき？）課題でもある。これら些細で容易に克服できるはずなのに自力では回避しがたい損失が、実際に個人や社会の負担となっている。だからこそサンスティーンとセイラーは、人間の体系的可謬性^{カビョウ}の記述と説明だけに満足せず、パターナリスティックな介入・干渉の必要性を力説するのである。

エ

（※注3）

リパタリアン・パターナリズムはこれらの過誤をどのようにして正していくのだろうか。危害原理に従うなら、それらは本来個々人の自己責任、自助努力に帰せられるはずのものであり、強制を通じてこれを正すことは当人の自律性を損なうことになる。そこでサンスティーンとセイラーは、人びとの自発的な選択を「強制によらずに」——危害原理を堅持しようとするリパタリアンでも受容可能なやり方で——改善しようと考えている。「そつと肘で突く」「それとなく促す」というしぐさを意味する「ナッジ nudge」の名で呼ばれるのは、まさにこうした非強制的な（もしくは弱強制的な）誘導手法なのである。

（出典：那須耕介「リパタリアン・パターナリズムとその十年」『法、政策、そして政治』、勁草書房、二〇一三年

（初出二〇一六年）、二二五頁～二二八頁

*なお、出題の都合上、文章の一部・見出し・強調を割愛し、一部の語句を修正している。

※注1 リバタリアン 個人の自由をなによりも重んじ、それに対する介入・干渉に反対する考え方。

※注2 パターナリズム 強い立場にある者が、弱い立場にある者の利益になるという理由で、行動に介入・干渉する、ということを支持する考え方。

※注3 危害原理 個人の自由を制約できるのは、その行為によって他者に危害が加えられる場合に限るとする原理。

問一 本文中のa・b・cのカタカナを漢字に直し、解答用紙に記入しなさい。

問二 傍線部アの「彼らの野心」とは、ここではどのような内容か。文中の言葉を使いつつ六〇字以内(句読点を含む)で説明しなさい。

問三 傍線部イに「この発見を二重に活用した」とあるが、この内容を最も端的に言い換えている一文(句読点を含む)を、文中から抜き出しなさい。

問四 傍線部ウに「二通りの判断系」とあるが、この内容を最も端的に説明している一文(句読点を含む)を、文中から抜き出しなさい。

問五 傍線部で「リタタリアン・パターンリズムはこれらの過誤をどのようにして正していくのだろうか」と問題が提起されているが、この問題に対して本文ではどのような解答が示されているか。文中の言葉を使いつつ八五字以内(句読点を含む)で説明しなさい。

令和7年度一般選抜（前期日程）
個別試験「国語」出題意図

〔出題意図〕

1.（配点六〇点）

鈴木宏昭『私たちはどう学んでいるのか』（筑摩書房、2022年）から、認知科学に基づいて教育と学習について論じている箇所を問題文とした。創発的学習の仕組みや具体的な問題解決の事例について書かれた文章の内容と構成を理解し、文中の用語や表現を適切に用いて説明することを求める問題を出題した。

2.（配点七〇点）

阪井裕一郎『結婚の社会学』（筑摩書房、2024年）から、マッチングアプリが及ぼしうる社会的影響について論じている箇所を問題文とした。問題文の論旨を踏まえて空欄を埋める問題、問題文の論旨を文中の言葉を使って説明する問題を出題した。また、文中に使われている漢字の知識を試す問題も出題した。

3.（配点七〇点）

那須耕介『法、政策、そして政治』（勁草書房、2023年）から、リバタリアン・パターナリズムという考え方を解説した箇所を問題文とした。問題文の論旨を踏まえて、ある部分の内容を説明させる問い、ある部分の内容を言い換えたり説明したりしている箇所を抜き出させる問い、問題文中の問題提起に対する解答を説明させる問いを出題した。また、文中に使われている漢字の知識を試す問いも出題した。

〔解答例〕

問題 1

問 1

自分の経験や他者の経験の観察から得た知識で主に構成されたゆるい認識の体系。

問 2

「持ち運びやすく、飲める」アイスがないという問題。

問 3

環境に働きかけ、そこから情報を得て、また考えて再度環境に働きかけるというサイクルの中で、自らの認知的リソースと環境のリソースを活用して、操作可能な問題を作り出し解決を図る過程。

問 4

エ

問題 2

問 1 a あんい b けいしょう c ふきゅう d しょうじょう e おびや

問 2 ① ㊦ ② ㊩ ③ ㊨ ④ ㊵ ⑤ ㊴

問 3 マッチングアプリという新しい手段が、既存のジェンダー規範や結婚をめぐる価値観を社会通念に沿って、それを後押しするかたちで補強する [という側面]

問 4 人が他者との偶然の出会いや関わりのなかで、絶えず価値観の修正や刷新をおこない、他者への理解や自分自身が変わる可能性が阻害されていない [という状態]

問題 3

問 1

a 耳目 b 構図 c 潜在的

問 2

リバタリアンとパターナリズムという、相容れないと通常はみなされてきた二つの立場を

矛盾なく統合できるという大きな望み。

問3

人びとの無個性的な愚かさは、パターンリスティックな干渉の必要性を基礎づけるだけでなく、より賢明な干渉手法を構成する中核的な要素にもなりうるとされたのである。

問4

一方は一般に「システム1」と呼ばれる反射的・無意識的・習慣的なふるまいを導く自動システムであり、他方は「システム2」と呼ばれる反省的で自覚的、計画的な熟慮システムである。

問5 略